

【論 説】

ソーシャル・ワーク実践をめぐる システムの思考とその方法

太 田 義 弘

1. はじめに
2. ソーシャル・ワーク実践へのシステム理論の系譜
3. システム理論導入の意義
4. 生活体システム論の思考方法
5. 方法としてのシステムズ・アプローチ
6. ソーシャル・ワーク実践としてのシステムの思考の展開
7. おわりに

1. はじめに

社会福祉とは、現実の社会で生活する人びとを援助する方策である。したがってそれを具体化するに当たっては、きわめて実践的な特性をもっている。その社会福祉の目標を維持・達成するために、クライアントの生活を援助しようとする専門的な実践行動の体系をソーシャル・ワークと呼んできた。広く社会福祉の実践をめぐる実証的研究といわれるものは、えんえんと積み重ねられてきており、歴史的にも膨大なものがある。しかし理論と実際とによこたわる深淵を一向に埋めることはできず、むしろそれらが当然であるかのごとくうけとめられてきている。そして経験と実証、建前と本音、馴れ・勘と科学的方法とが長い歴史的状況の中で、さしたる抵抗もなく併存してきた。

実証的研究とは、本来理論と実際との一体化のうえになりつつ発想であり、それはクライアント援助を旨とした専門性と科学性へのチャレンジである。ところが實際をふまえた理論も、理論をふまえた實際も、残念なことには目標に対して統合的に還元されてはこなかった。それはな

ぜか、制度・政策、実践計画、方法、解決を必要とする課題とを総合的にみる視点をもたず、つまり現実の社会と、そこでの営みとしての人間の生活とを関連づけて考察する視点をもたなかったからである。方策展開への工夫や弾力性を忘れて、それを絶対化した条件の中でクライアントの処遇を模索し、操作することのみに翻弄されてきたり、あるいはクライアントの現実を無定見に擁護して、もっぱら国家社会やその政策への理論的批判や、特殊な研究目的に焦点化された理論的考察に終始し、実践に直接結実されない研究も少なくなかったからである。その結果、理論と実践との相克や不協和、両極分解がますます拡大することになってきた。

しかし一方では、このような現実から脱却しようと幾多の実証的研究がつみ重ねられ、専門性・科学性の名のもとに実践にそくした理論を構築し、その理論を追いながら、さらに実践が模索される中で、独特な展開技法としてのアプローチが出現し、発想の基本的視点を刷新した特有のモデルなどが生れてきている。これらの研究を通じて確かに理論と実際の溝が、埋められてきたことは事実であるが、しかし現実には精巧な理論が、いまひとつ実践の場面で十分に活用されていないことも否定できない。理論的であることはもちろんのこと、専門的であり、かつまた科学的ではあるが、実用性に欠けるところから、結果的には実践への適用方法に、まだまだ工夫が必要である。

さてその理論と実際との掛橋となって、実践を名実ともに具体化する可能性をもつ発想が、システムの思考である。世は、あげてシステムの時代だといわれている。しかしソーシャル・ワークの領域にシステムの発想が登場するようになって、すでに30年近くになる。だがそれは発想としてのシステム概念であって、まだ方法の中に具体化されてはいない。ソーシャル・ワーク実践とは、複雑な社会システムの問題であるが、システムを具体的に研究するシステム科学の原点に示唆を求めながら、その援助活動の方法に新たな展望を得たいとの願いが、このテーマの出発点である。本論考は、そのシステム理論の展開と、実践方法を具体化することをねらったものである。

2. ソーシャル・ワーク実践へのシステム理論の系譜

かつてダイナミックスという言葉が、事柄の複雑に入り込んだ相互作用をなす全体性を表す用語として、もてはやされたことがある。厳密には、その全体をなす事象の分析が必要ではあったが、それらを構成する要素の解明もないまま、まことに解析困難な実体をそのまま表現する重宝な言葉として濫用されてきた。システムという用語もまた、これと似た歴史的背景をもっている。前者が混沌とした力動的全体性を意味するのに対して、後者は秩序立った系統的全体性を意味する用語として日常生活の中で安易に用いられてきた。いずれにしても、とらえようのない全体性へのアプローチに期待をこめた姿勢を表明する視点である。この見方は、当然とも遠からずといえるわけだが、システムという用語の特徴が、それを構成している秩序立った要素と、その要素の結合がもたらす独特な働きにある。したがって、ある事象の本質をどのような要素に分解して、理解しやすくすることが可能なのか、その方法がシステムの思考をめぐる有効性の鍵を握っているといえる。

一般にシステム科学という名のもとに包括されている分野は、人間と機械システムとの科学的関連をめぐる計画や設計を取り扱う「システム工学」、人間・物質・財貨・機械などの科学的管理にシステムの発想を用いる「オペレーション・リサーチ」、人間のために科学技術を最大限に活用し最大の効果をあげようとする「人間工学」⁽¹¹⁾などからなりたっているが、元来システム論は、自然科学の分野から固有の視点を発想することから出発してきた。それは自然事象の認識に、「全体と部分」からなるシステム思考の認識論理が、いとも自然になりたち、立証されてきたからであることは容易に理解できるところである。

これらの自然科学的・工学的システム論の系譜とともに、一方では1968年ベルタランフィ L. Bertalanffy によって、一般システム論 General System Theory⁽¹²⁾の研究が、方向づけられ進展してきた。そのことによって、システム概念に対する基本的視点やその意義、特性が体系化されて理解されるようになってきた。工学的システム論が、システム関係やシステム展開の技術に多大な成果をあげてきたのに対して、かれの一般

システム論は、生物学での有機体論から出発していて、本質的には在来の物理化学、反応速度論と熱力学から示唆をえ、開放システムと定常状態理論という進化・発展する生物学的組織体を解明する実体としてのシステム概念を明らかにしてきた。

ベルタランフィは、まず一般的にシステムを定義して「相互に作用しあう要素の集合」と規定し⁽⁴³⁾、その要素の相互作用しあう複合体を扱う場合に、三種類の区別が可能だとしている。「すなわち、(1)要素の『数』によるか、(2)要素の『種類』によるか、(3)要素の『関係』によるかである。」⁽⁴⁴⁾ 一番目の種類の特性は、要素の数全体数を問題にするところから総和的と考えられ、二番目の種類は、その成り立ちの種類を問題にするところから構成的と考えられる。そして三番目の種類が、自然科学的システム論と異なり関係的と呼ばれる特徴である。これは相互作用しているシステム状態をいうわけで、相互作用とは、各要素が関係の中において存在すること、したがって、ある関係のもとにおける一つの要素の特徴は、次の関係のもとにおいては、同じその要素が、先ほどとは違った特徴を示すということである。つまりその要素は、関係とのかかわりにおいて独立した特徴をもっていることになる。

一般システム論の特徴は、有機体論であって、この三番目の特性である要素間の相互作用しあう関係を重視している。したがって、機械論的なシステム論である生命現象の実体を原子論的な視点から、それによって成り立つ部分的過程に分解して理解することを目的にした立場とは異なった視点をもっている。それは工学的システム論が、生きた生物体を細胞へと分解し、生物体の活動を生理学的な過程から物理化学的な過程へと分解して理解することになる問題を指摘⁽⁴⁵⁾しながら、さらに伝統的物理学の取り扱う対象が、閉鎖システム、すなわちシステムとして環境から孤立した存在であるのに対して、生物体はどれも本質的には開放システムであって、成分の流入と流出、生成と分解の中で自己を維持しており、生きている限りけっして化学的、熱力学的平衡状態では存在せず、それとは異なった定常状態にあること、これこそがあの代謝と呼ばれる生命の根本現象にほかならない。つまり環境との関係の中で開放システムとして、生物体は定常状態を維持している⁽⁴⁶⁾ システム的存在であると考えられる。

ベルタランフィは、システムを発想する前提に、三つの重要な課題を指摘している。第一は、「システム科学」といわれるもので、システムの科学的な探求とそれによって構成される原理的理論である。第二が、方法とでもいえる「システム工学」であり、そして第三が、「システム哲学」である。^(註7) 特にこの一般システム論は、思考と世界観を改変する新しい科学的規範としてのシステム哲学に支えられているところに大きな意味がある。

この哲学は、かれによると三つの部分から成り立っている。一つは、観察される世界のいろいろなレベルでどんなふうにシステムが実現しているかという問題での「システム本体論」、二つ目に、観察され、あるいは観察から推測され、観察者から独立して存在する実在システムに対して、論理学や数学のように本質的に観念や記号によって構成される抽象的な「概念システム」があること、そしてもう一つ、素粒子や物理法則に単純に還元できない行動科学や社会科学の中で生じる問題への認識をめぐって、認知は必ずしも実在そのものの反映ではない。そして知識は、単に真理や実在への近似ではないし、それは知るものと知られるものの間の相互作用であるところから、「システム認識論」の重要性を特に強調して指摘している。^(註8) システム理論が、人間とその生活を機械化し、無価値化してとらえることにつながってはならない。人間の実存に迫り、その生活としてのオーガニゼーションの解明と同時に、展望への示唆を与えるものでなければならない。われわれが一般システム論に注目する大きな意義は、そのもつ論理的思考過程とともに、システム哲学に支えられた理論を具体化しようとする思想性にある。

システム概念の系譜は、学際的で多岐にわたっているが、われわれの最終的な関心の焦点は、社会システム論である。社会学の領域で、社会システムへのアプローチが、歴史的につみ重ねられてきた。バックレイ Walter Buckley は社会システムのモデルとして、人間を一種の精巧な機械とみなし、物理的客体として取り扱った「機械モデル」、生物学に示唆をえた「有機体モデル」、社会の構造的な変動に焦点をあてた「過程モデル」、ホマンズ G. C. Homans やパーソンズ T. Parsons らによる「均衡一機能モデル」^(註9)などに類型化している。いわゆる社会学的モデルで、社会の構成をシステムとして理論的要素に分析・還元し、それらの統合

的機能の全体像をシステムとしてとらえる立場で、システム分析自体を目標としているわけではないが、分析主義的システム論、あるいは構造論的システム論といわれるものである。

もう一つの流れは、さきほどの一般システム論を、人間とその社会生活の解明と認識に方法論として応用した社会システム論である。これは事象を科学的に分析することよりも、基本的には、その相互作用の上に成り立つ全体性に焦点をあて、さらにすでに分化してきている諸領域を統合的に再編成する共通な枠組みに中心点をおいた統一的・全体主義的システム論といわれるものである。構造論に対して、これは事象の相互関係論ともいえるサイバネティックス、これは制御システムの理論で、システムと環境、システム内部での情報運搬、さらに情報と関連したシステムの機能のフィードバック（制御）に中心点をおいた理論であるが、その原理を用いた情報論的システム論といわれるもの、さらにそれに資源・環境論をとりいれたいわゆる情報・資源処理システム論として、理論が展開されてきている。これは環境との相互作用により、資源をとりいれ、積み上げてきたプログラムにしたがって、自己を創造的に適応させていくシステムの主体性を重要視する発想で、システムが環境に機能し、対象それ自体を変容させるだけではなく、システム自体を調整し、適応・再編成する機能をもつと考えられている。これら一連の特性をもつ全体的状況を「情報・資源処理システム」とよんでいる。

3. システム理論導入の意義

人間と社会の複雑な相互関係と、そこでの生活をシステム概念を用いて解説すること、これは社会学的な社会システム論がもたらしたところである。実践活動としてのソーシャル・ワークは、社会システム論の活用から具体的に実践を展開する独自の方法をもたなければならない。人間の生活が、そしてソーシャル・ワーク実践がシステムであり、システム過程として展開されるという発想に、少なくとも実践の料学的方法に関心を抱くものなら疑義をはさむものはやしない。しかし方法論としてのシステム概念の展開には、その理論の複雑さからいまひとつ説得力のある研究がみあたらない。ところで近年の社会システム

論の進展ぶりから、その成果を活用した実践理論のシステム展開の可能性がいくらか展望できるようになってきた。

そもそもゴードン・ハーン Gordon Hearn が、1958年にソーシャル・ワーク実践にシステム理論の導入を示唆して^(註10)以来、自ら一般システム論への関心を深めるとともに、アプローチの類型について考察^(註11)することからはじめ、他方ではミラー James G. Miller^(註12)やバックレイ^(註13)らによる一般システム理論やアプローチに啓発をうけて、5人の研究者の協力のもとに『The General Systems Approach』^(註14)と題する小冊子をまとめている。そこには、ハーンの一般システム理論の展開をめぐる統合的・全体的概念の解説を中心にして、システムとしてのクライアント、社会システム理論や一般システムズ・アプローチなど、実践場面での展開についての解説が、事例を交えて試みられている。

これらが契機となって、一躍システム理論がソーシャル・ワーク実践の領域で注目を集めるようになってきたのが、1970年代初頭のことである。ハーンらの研究成果より直接の影響を受けたわけではないが、ゴールドシュタイン H. Goldstein の『A Unitary Approach』と称するソーシャル・ワーク実践理論も、一般システム理論を内包した社会システム論の展開である。^(註15)内容は、目的、対象、活動などをめぐるシステム概念展開としての Unitary Approach の原理的解説である。これは社会システム論生成の系譜を忠実にたどりながら実践理論の構築をしようとしたものである。つづいて時を同じくしてピンカスとミナハン A. Pincus and A. Minahan らによる業績^(註16)が発表されるに及びシステム概念が、広く一般に注目されるようになってきた。

ピンカスとミナハンは、ソーシャル・ワーク実践を構成する構造をシステムの思考を用いて分析し、その相互関係をプロセスとして考察している。モデルの諸要素の組織化には、一般システムズ・アプローチを活用している^(註17)としているが、元来教育や実践に役立つ中範囲アプローチの定立を目ざして、独立した固有の理論展開を意図しているわけではない。したがって、システム理論の展開というよりは、実践アプローチへの構造分析にシステムの発想を援用しているといったほうが正確であろう。

つづいてサイポーリン M. Siporin によると、一般システム論、社会シ

システム論、生態学理論は、それぞれの背景にシステム工学、生物学、社会学、人間生態学、文化人類学などその領域は異なるが、テーマをめぐって基本的には共通な視点をもっており、本来は「生態学的システム論」として統一的に志向されるものであるとしている。⁽¹⁸⁾ ベルタランフィ、ハーンらによる研究の成果を追跡しながら、システムとは、特殊な環境の中でそれを構成する部分が、相互依存、相互変容、相互作用関係を通じて影響しあう有機的全体性 holistic をもち組織化された単一構成体であり、そしてシステム・モデルとは、問題・人・状況のゲシュタルト、つまりその全体性の概念化を可能にすることである。⁽¹⁹⁾ そこから、実践場面におけるクライアントや援助プログラムの生態的な実体をとらえる概念として、生態学的システム論を主張している。

さらにシステム理論の有効性を指摘しているコンプトンとギャラウェイ B. R. Compton and B. Galaway によると、システム理論とは、諸科学から知識を引きだし活用するための分析手段であり、データを考察し、組織化する思考方法である⁽²⁰⁾としている。そこから実践プロセスの流れを分析し、そこに必要とされる知識や価値を機能させる系統的思考がシステム理論の主たる特徴であるとしている。

以上がソーシャル・ワーク実践へのシステム理論導入の緒を担った主たる立場と動向の簡単な紹介であるが、近年出版されてきているソーシャル・ワーク実践に関連した専門書や研究論文のほとんどに、これらシステム理論への言及や解説、展開をめぐる発言が必ずといっていいほどある。それほどに理論が一般化してきたのは事実であるが、少し覚めた視点から、これらの動向をふりかえてみると、一体システム理論の出現が、援助活動としてのソーシャル・ワーク実践そのものにどのような影響や効果をもたらしてきたのであろうか。確かにソーシャル・ワーク実践モデルやアプローチの理論的研究の進展に、飛躍的貢献をしてきた事実を否定するものはいない。しかしその後の研究活動が、実践の最先端で活動するソーシャル・ワーカーに、どれほど実践場面で科学的、専門的、かつ効果的に役立つ貢献をしてきたのであろうか。だが現況は、システム理論のもつ画期的な可能性の礼讃と、実践活動の科学的解説概念としての役割に終始している。たとえばピンカスとミナハンのシステム概念はよく引用されるところであるが、これなども実践を組織的に思索

する概念として、つまり実践そのものをシステムとして分析することで終っている。^(#21)したがって、その本来の目的を果すには、まだ少し時間が必要であるといわねばならない。理論が総合的で速大であるだけに、実践場面におけるその具体化には、膨大な研究成果の積み上げが必要とされている。

そこで期待される目的への前進のために、現にシステム理論が、実践にどのような意味において貢献してきているのか、このことを少し整理しておきたい。しかしシステム理論の意義について述べている文献は、例外なくこのことに言及しているわけで、いい尽されている感じがしないわけでもないが、あえてそのことを試みる意味は、システム理論の実践的展開の基礎的条件を確認しておくためである。

それらは、

- (1) 人間科学への哲学が、発想の基礎にあり、その姿勢が理論構築に具体化されている。
- (2) 人間の生活など生態的理解を必要とする事象の把握に、システムの思考は最適の方法である。
- (3) 生活という統合性をなす基本的概念を、有機的全体性 holistic として認識し、考察する視点が固有である。
- (4) しかし有機的全体性の基礎には、それを構成する要素の分析的思考方法という伝統的視点を内包しており、構造分析という視点からの意義も深い。
- (5) 人・問題・状況などの説明概念としても、系統立った思考方向を示唆しており、論理的で説得力がある。
- (6) 既成の実践モデルやアプローチと相克するものではなく、むしろそれらの独特な実践展開の特徴を創造的に補強する思考方法として大きな意味をもっている。
- (7) システム発想の原理ともいえる要素の複合関係、つまり流入するエネルギー、資源、情報に対応してシステムのもつ安定、均衡、相互変容、循環などの調整過程を通じてコントロールする機能は、ソーシャル・ワーク実践を展開する発想に示唆深いものをもっている。
- (8) システム理論は、ものの見方であるから、理論を用いて解説され

たシステムは、実体としてのシステムそれ自体ではないが、理論によって抽象的に概念化された思考方法を用いて実体のもつ本質に迫ろうとしている。

といえる。しかし現在のところこれ以上の思考方法は見あたらず、人間科学の限界を自覚しながらもやはり、人間のシステムとしての生活とその援助の実体に迫ることのできる最良の理論が、システムの思考方法であるということができよう。

4. 生活体システム論の思考方法

考察してきたようにシステム理論に基づくソーシャル・ワークの実践的展開は、まだ今後の課題といわねばならないが、理論の発展的経緯から理解できるように、それは広い科学的背景をもっており、したがって広範な科学的領域で活用展開されてきている。隣接科学としてわれわれと共通な課題をもっている精神医学界でも、治療法にシステム理論を適用した試みが、システムズ・アプローチとして展開されてきている。特に家族の理解と協力が不可欠な精神医療において、家族療法は早くから家族関係と環境、治療のダイナミックスな展開にシステム理論を導入し、実践的活用に先駆的努力をつみ重ねてきた。そもそも米国で、ケースワークが、その誕生の時から家族を視野に入れた援助を試みてきたことはもちろんのこと、ソーシャル・ワーカーたちが数10年もまえから青少年非行や情緒障害児の矯正、指導、教育に家族を単位にした援助を展開してきた家族療法の原型ともいえる歴史がある。これらの動向に精神医学は、早くから関心を示し、それを今日の多様化した家族療法の基礎へととりいれてきている。そしてこの領域は、ソーシャル・ワーカーとの協同なくしては目標の達成が不可能であるところから、われわれと関心を共通にするところが多く、特にそのシステム理論の活用方法には示唆深いものをもっている。

一般に家族療法を大きく分類すると、精神分析的、行動学的、そしてシステムの家族療法とに分類できる。^(註22) このシステム論的家族療法は、精神医学者ジェームズ・ミラーによって一般システム理論を、生命をもった生活体から構成される一般有機体に、適用する試みから始まってい

る。心理学や精神病理学の領域に、システム概念をもちこもうと試みたオールポート G. W. Allport やメニンガー K. Menninger, ラパポート D. Rapaport など幾人かの学者による努力に続いて、なんとといっても実践的システム理論の集大成は、ミラーに負うところが大きい。かれは、自然科学的発想に基づいたシステム概念の一般システム理論としての理解と摂取の上に、一般生活体システム理論を構築してきた。

ミラーによると、「一般システム理論とは、物質とエネルギーの組織的協働、下位システムあるいは構成要素の相互作用、通常的空間・時間の連続性の上に存在することがらの積み上げと考えられる具体的システムの階層性から構成されているといえる」^(註23)と、森羅万象をシステム概念の適用によりとらえるとともに、その下位システムに生活体システムを位置づけ^(註24)ている。それはシステムという概念が、物質・エネルギー・情報のおりなす論理的で複雑な概念からなりたっており、生活体システムもまた情報によって組織的に系統化された物質とエネルギーから構成される^(註25)概念で共通にとらえられると指摘し、そしてさらに、基本的に生物学と社会科学とは共通のシステム概念で解説される^(註26)との視点のもとに理論化を試み、統一原理の上に一般システム理論を行動科学に適用して展開してきている。^(註27) これらの理論としての集大成は、やがてこの領域におけるシステム理論展開に決定的な影響を与えることになってきた。そしてこの行動科学のための一般システム理論の確立をめざした研究を出発点にして、一般生活体システム理論 General Living Systems Theory が構築されてきている。

ミラーの一般生活体システム理論は、人間科学あるいは行動科学の展開に目標が置かれており、ソーシャル・ワークや精神医療のような実践科学には非常に示唆深いものをもっている。しかしまだ最終理論として完成されたものではなく、読む者の想像力をたくましくせざるをえない模索中の部分が散見される。

かれの生活体システムの特徴は、(1)生活体システムの7レベル、(2)上位システムと下位システム、(3)物質・エネルギーと情報の交換、(4)開放と閉鎖システム、(5)構造と過程、(6)物質・エネルギーと情報を処理する下位システム、(7)安定状態、(8)適応過程など^(註28)とまとめることができる。まずシステムには、7レベルの下位システム subsystem から上位システ

ム suprasystem までの段階があり、それは細胞、器官、生命体、集団、組織体、社会、国際社会のレベルへと拡がっている。^(註29)

その理論展開にシステム関係の特徴を表す概念として、エントロピー entropy という熱力学における分子速度を測定する概念が用いられている。それによると、ある物体の一点が加熱すると、その熱は物体全体に伝導し拡散しようとする機能を果し、そして物体をつねに均衡状態に維持する不可逆的な傾向をもっている。この傾向をエントロピーと呼ぶが、外部環境からの影響を受けることのない閉鎖システムでは、エントロピーの機能によって究極的には均一不変な状態に終息することになる。^(註30) 一般システム理論において、エントロピーは、システムが構成要素間の機能として、その属性が均衡状態に向かう傾向を指している。開放システムでは、環境とシステム関係をもつところから、エネルギーと情報の交換が生じ、その結果エントロピーの均衡的終息機能は延引されることになる。この開放システムにおける逆エントロピー傾向をネグエントロピー negentropy^(註31)と呼び、開放システムつまり生活体システムの特徴と考えている。

これは人間の生活を、システムとして理解する上でとても重要な意味をもっている。生活体システムが機能するということが、開放システムであるところから、物質・エネルギーと情報とを環境システムと交換する過程を通じて、ネグエントロピーを増大させシステムを活性化し、発展再組織化することである。そして上位システムや下位システムの変化に対応して生活体システムをつねに一定の状態に適應させていくことである。

上位システムと下位システムとは、階層関係をもっており、上位システムが下位システムの属性をも内包しているところから、上位システムに拡大するにしたがって複雑な特性をもつシステムが存在することになる。

構造と過程については、構造とは、システムを構成する要素からなりたっており、現実には上位システムに対する下位システムの構成状況を意味する。過程とは、システムが作用する筋道を意味しており、比較的短時間に運動するシステムの機能を指している。システムの長時間かけた変容過程は、プロセスという概念ではとらえず、むしろ成長・発達と

いう概念でとらえている。^(註32)したがって、過程を時間的な経過を追った概念では理解せず、システム内外との物質・エネルギーや情報の交換する過程であり、システムの機能する拡がりとして理解している。そしてその内容として、情報を取り扱う下位システム過程を三通りに大分類、さらにそれを19の過程に細分類している。ここには過程をシステムの考察するための詳細な視点が指摘されている。^(註33)

開放システムとしての生活体システムの特徴は、触れてきたように外界の変動に対してシステムをその内部で微調整をしながら均衡を維持するところにあった。それはシステムを構成する要素の機能を調整すること、つまり下位システム間の構成バランスを一定に保持することによって、そこに出現する変動や危機に対応することである。しかしその場合に、完全なバランスの再構成が望めず、一定の許容限度内であれば一応のシステムとしての機能が維持できる範囲を安定状態と呼んでいる。^(註34)このような弾力的なシステムのもつ属性によって生活体がシステムとして存在していると考えている。

もう一つ生活体システムのもつ特徴は、適応過程という概念である。これは安定状態の維持を継続的に可能にしようとするもので、その結果システムが変容し成長することを意味する。一般的に時系列変化を中心にした発想が過程概念だといえるが、ミラーは、機能と適応を過程としてとらえ、その相違を時系列の長短から区別している。むしろこれらは機能と過程と分類するのが一般的であろうが、かれは時系列変化を伴わない構成要素の機能、つまり広がりをも過程概念に包摂して考察している。したがって適応とは、システムの成長と発達を意味している。この適応過程は、二種類に分類することが可能である。物質・エネルギーと情報が交換される基本的な一次的適応過程と、フィードバック機構を通じての二次的適応過程とである。^(註35)フィードバックは、複雑な適応過程であるが、入力され情報交換を通じて出力されるチャンネルと、その成果を再入力するチャンネルとが存在する。この場合際限なく二つのチャンネルを通じて循環し、再生産される拡大過程をポジティブ・フィードバックと呼ぶが、これは生活体システムにとって、安定状態を脅かす危険な過程だと考えられ、むしろ生活体システムにとっては、ネガティブ・フィードバックつまり出力と入力とをコントロールして循環させる過程

が重要である。このことによってシステムの安定状態が、継続的に保持されていくことになる。そしてそこでの適応過程としてのフィードバック概念の重要性が指摘されている。^(註36)

以上がミラーによる生活体システム論の思考方法の概要である。システム理論を精神医療の実践に活用しようとしていることでは、われわれにもっとも示唆深い方法を提供してくれているといえるが、そのシステム理論展開の中心的レベルは、集団としての家族にある。確かに医療が、生活体の典型である病める人間個人に焦点化して提供されてきている現状から見れば、システムとしての家族を対象としての視野に入れて働きかける家族療法には斬新なものがあるといわねばならないが、ソーシャル・ワークの方法には、それに加えて実践組織の問題から、さらに国家・社会レベルの制度や政策までシステムの中に焦点化して取り扱わねばならない課題があることを忘れてはならない。

それにしても家族療法としてのシステムズ・アプローチの方法には、ソーシャル・ワーク実践へのシステム理論の展開に、貴重な臨床的方法の基礎を提供してくれている。その視点に学びつつ方法をさらに模索してみたい。

5. 方法としてのシステムズ・アプローチの課題

システムの家族療法にもいくつかの学派があり、それぞれ固有の視点をもっている。一般的に米国で伝統と影響力のある学派として、ボーエンの家族システム療法、ミニューチンの家族構造療法、そしてMRI Mental Research Instituteの家族相互影響アプローチとに三分類されている。^(註37) これらのアプローチがもつ方法に、ソーシャル・ワーク実践を系統的に思考するに必要ないくつかの重要な視点が浮彫にされているように思える。

そこでこれら三者の特徴について、簡単に触れておきたい。まずボーエンによる家族システム療法は、精神分析学の影響を多分に受けたもので、発想としては保守的な立場をとっている。かれは幾世代にもわたって続く家族関係の歴史的過程を追いながら、それらがもたらす原因や結果が、家族の精神生活過程にいかなる影響を与えるかについて考察をす

すめている。ポーエンは、感情に支配されやすい人間を、感情と知性システムの基本的分化の度合いが低く、思考・感情・行動が外界の影響に融合しやすいとして、個人差を説明している。家族の病理は、幾世代かにまたがる分化と融合の過程をへて反映されてくると考え、そこでの病理は、かれが帰属する家族システム内での感情的エネルギーの均衡が混乱した状態にほかならない。したがってその個人の示す症状や、逆に適応や成長過程をも家族のもつシステム関係として追求しようとしている。⁽¹⁸³⁸⁾

それを解説するために次のような家族システム理論としての概念を組み合わせて考察している。(1)自己の分化、(2)核家族の感情過程、(3)家族投影過程、(4)三角構成関係、(5)感情切断、(6)多世代伝承過程、(7)夫婦葛藤、(8)社会的退行とがそれである。⁽¹⁸³⁹⁾ 家族病理は、多世代に及ぶ基本的分化度の伝達と、家族が出会う障害から感情的に反応する過程の結果であると理解できる。したがって過去を重視し、両親の基本的分化度の低くさが、家族病理の重要な原因の一要素であるところから、家族投影過程と多世代伝承過程の産物である基本的分化度を高めるために、時間を遡った自己理解や、治療的变化への意識的理解が求められる。⁽¹⁸⁴⁰⁾ この視点が、われわれにシステム思考における家族システム関係の歴史的視点、つまり過程を重要視することの意味を改めて指摘してくれているように思える。

次にミニューチンによる家族構造療法は、構造主義的理論に立脚していて、システムの全体像を理解するために、それを構成している要素と要素との結合関係の解明に焦点化されている。全体としての家族は、それを構成する家族員の結合関係を考察することによってのみ理解できるとしている。そして(1)構造の変容状況、(2)家族機能の改善と修復、(3)家族の自己統制機構の維持とを、家族療法における基礎的構造概念として指摘している。⁽¹⁸⁴¹⁾ 援助の目標は、家族構造を変容させることを通じて、家族病理と考えられる問題を解決することである。独特な構造を分析する視点から問題をとらえ、構成要素である家族員の結合関係を改善する一種の関係療法である。

家族構造とは、家族員によって構成される人間関係のパターンから抽象化される概念である。しかしミニューチンは、家族関係の理論的構造化に関心があったのではなく、いかに家族の抱える問題を理解し、その家族特有の生活パターンを適切に、かつ迅速に把握するか、そしていか

に家族構造の変容を可能にするかということに関心をもってきた。家族構造を、境界線として設定される下位システムからなる構造として夫婦、親子、兄弟などのサブシステムに分類、^(註42) また家族は、状況に対応するために新しい機能を形成していく。その適応過程を通じて、さらに新しい家族構造を作り出している^(註43)ことなどを理論的に追求しているが、その家族構造療法の主たるねらいは、実践活動としての特性にある。したがって理論そのものは、総合的に洗練・整備されたものではないといわねばならない。そこでかれの援助活動としての家族の再構造化を目標にした7カテゴリーを指摘すると、(1)家族の相互変容関係パターンを現実化する、(2)家族が相互作用する境界線の設定、(3)強調点の段階的拡大、(4)課題の設定、(5)焦点としての徴候の活用、(6)ムードづくり、(7)教育やガイダンス^(註44)の必要性が述べられている。

家族システムの構造を分析することでは、まさにシステム論の展開に他ならないが、ミニューチンの家族構造療法の焦点は、システムの思考に基づいた家族構造の再編成を通じて、家族構成員相互の行動が問題解決に志向するよう計画されたものである。構造分析が目標ではなく、システム分析的思考がもたらす要素と要素との結合結果としての機能に問題解決を期待している。システムとは、構造としての要素によりなりたつ概念ではあるが、かれが期待しているのは、そのもたらす効果である機能に他ならない。

さて今一つ家族相互影響アプローチといわれる別称 MRI について言及しておかねばならない。これはシステムのもつ一大属性としての機能に焦点化したアプローチである。MRI は、今日のアメ리카における家族療法界では屈指の歴史と大勢力をもつ研究と治療を目的にした機関である。ジャクソン D. Jackson が、精神分裂病者とその家族の研究を目的に設立をして以来、その後研究対象を行動障害やその他慢性疾患患者の家族のコミュニケーション研究へと拡大してきた。そして今日では、コミュニケーション理論を適用した短期処遇アプローチを展開してきている。理論的背景としては、ベルタランフィの一般システム理論、ウィナー N. Wiener のサイバネティックスとベイトソン G. Batesonらによって研究されてきたコミュニケーション理論などである。このアプローチは、相互影響 Interactional View アプローチと呼ばれ、他者とのコミュニケーション過程を

展開することを通じ、機能的効果を期待する相互影響過程に焦点化された方法である。

まず家族の相互影響過程とは、コミュニケーションをシステムの視点から分類した行動のパターンについて考察することである。理論的に類型化されたコミュニケーション理論から、クライアントと家族とのコミュニケーションの特徴を分析・理解し、コミュニケーションの構成要素への働きかけを通じて、つまり行動パターンの改善によって家族の機能を再編成しようとする過程である。そこではコミュニケーションの特質が、五つの暫定的公理に集約されていて、⁽¹⁴⁴⁾ さらにその展開方法をめぐるコミュニケーションの多元性から、言語外での形態としての心的過程まで、克明にコミュニケーション概念と過程、展開が論じられている。ややもすると無意識の心的過程を研究する精神分析とも無関係ではないと考えられるが、しかし過去や歴史は問はず現実を重視することでは、むしろ現象学的、実存的思考に近いものがある。またコミュニケーション過程での相互影響関係を、行動パターンの観察を通じて展開することでは、行動療法とも共通点をもっている。

意図的な行動パターンの変容をもたらすコミュニケーション過程を通じて、クライアントと家族が相互に影響しあう機能を重視している。特にMRIの短期療法の原則などは、ソーシャル・ワークの実践的方法に具体的な示唆を与えてくれるものである。これらについては、遊佐安一郎氏の前掲書に詳述されている。

さて紹介してきたこれら三つのアプローチは、それぞれに異なった特徴をもっているが、基本的には、(1)システム思考、(2)クライアントと家族、(3)臨床的実践アプローチ、(4)疾病の治療、(5)問題と状況改善への援助をすることでは共通性をもっている。しかしなんといってもこれらの共通目標にもかかわらず、問題のとらえ方、焦点、状況をめぐる仮説、アプローチ方法は、全く特殊でユニークに展開されている。そしてその効果は、また臨床事例を通じて共感を呼び、広く理解されているところである。同一クライアントに対して三通りのアプローチで、それぞれその有効性を客観的に問うわけにはいかないし、またそうすることに意味があるとも思われないが、とにかく向き不向きはあるにせよ経験と信念に基づく科学と理論、その技法による治療的な出会いが、そこに展開さ

れることによって、多くの人びとの生活が改善向上している事実はなにによっても否定できない。

さてこれらのシステムズ・アプローチといわれる方法が、ソーシャル・ワーク実践に提供する課題がいくつかある。まずミラーの一般生活体システム理論より、生活体としてのシステム理解のための「構造と過程」^(註46)という思考方法が、まず第一に、実践というある限られた領域内でのシステム関係理解から、さらにマクロな社会や世界を、実践へ具体的に還元していく視点を構造として示唆していること、第二に、生活体という要素の構造と、それをとりまく環境的な上位の階層的構造からなるシステム関係を、過程として有機的にとらえていること、これはプロセスをむしろ構造間のシステム関係と理解しており、時系列変化より関係のもたらす機能に期待を寄せていて、アメリカ社会学の構造・機能主義的視点と共通なものをもっている。第三に、生活過程という意味での時系列変化については、システム過程の成長あるいは発達という概念でとらえている。^(註47) 成長・発達は、システムの過程ではあるが、時系列概念としてはかなり長期間にわたる構造の変化を意味している。したがってソーシャル・ワーク援助のような比較的短い一定期間の変化をとらえる発想ではない。ミラーにとって過程とは、短期的にはシステム関係の機能を指し、また長期的にはシステム構造の成長・発達を意味していることになる。

以上のことからシステム思考の三基本的要素として、『構造』と『機能』と『過程』とを指摘しておかねばならない。構造とは、システムを構成する要素であり、機能とは、入力された情報を構成要素間で処理する働きとその成果を意味し、そして過程とは、要素とそれらの結合がもたらす機能との変容状況であると一先ず指摘しておきたい。

さて一般システム理論や一般生活体システム理論を応用した前述の家族療法としてのシステムズ・アプローチは、それぞれこの三つのシステム思考の特徴をさらに展開したものである。構造的視点からは、ミニューチンの構造療法の実践的展開に学ぶところが多いし、機能的視点では、MRIのコミュニケーション過程を通じての相互影響アプローチがもたらす方法に新鮮さを覚える。また過程的視点ということでは、三アプローチが等しく独特のニュアンスをこめて強調しているところであるが、過

去の歴史的経過から現状を理解することでは、ボエンのシステム療法が示唆に富んでいるし、過程を比較的短時間の効果としてとらえるならば、前二者に実践方法として参考にするべき点が多い。

6. ソーシャル・ワーク実践としてのシステムの思考の展開

ソーシャル・ワーク実践にシステム理論の導入が模索されるようになって以来約30年が経過してきた。しかし理論の実践場面での展開には、今一つその実践的性格を十分に活用した研究がない。現段階でこの理論が、ソーシャル・ワーク実践に貢献してきたのは、(1)実践のダイナミクスについての説明概念として、(2)事象への holistic な視角の必要性とをめぐってであろう。前者は、アメリカ社会学にみられた構造・機能主義的な事象の論理的総合分析とは異なり、事象の実証的・実体的把握を目的にした分析的視点に示唆深いものを提供してきた。また後者は、要素によって構成される全体性を、状況に対して機能する生態的概念で統合的にとらえることの必要性を指摘しているところにある。

さてかねてよりソーシャル・ワーク実践へのシステム理論の適用をめぐり、ささやかな考察を進め、実践システムの分析を試みてきたところであるが、特に本論考に先立つ小論^(註48)にて、実践の構成要素に基づき構造をシステムとして分析し、さらにその内容を下位システムとして指標と因子とに分類して、そのシステム関係を検討してきた。もちろん実践という深遠な援助関係の実体が、このようなシステムで十分に構造として分析できたという実感があるわけではない。しかし幾度かのパイロット・スタディを重ねることによって、いくらかでもその実体に近いシステム分析に到達しつつあるのではないかと思っている。再三弁明しているごとく人間の生活という生態的・価値的実体を、いくら高尚な理論とはいえシステム概念で抽象化して理解することには限界があり、それに疑問を感じる限り、その意義は半減せざるをえないであろう。だがしかしその深遠な実体に接近する絶対的な理論や方法が存在しない現実から、それに近づく方法を最良のものとして錬成していくこともまた必要不可欠なことだといわねばならない。

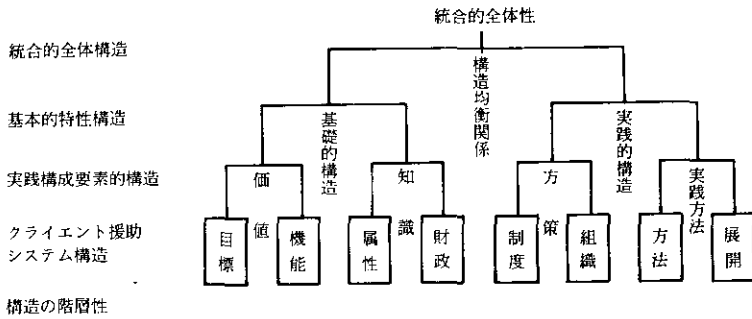
解説してきたように精神医療の領域において、治療の対象にシステム

第1表 クライアントとその生活援助システムの構成と内容

内容 構成	1 属性(基礎的特性)		2 財政(生計の基礎的条件)		3 目 標(生活態度)		4 制 度(生活規範)				
	指標	項 目	指標	項 目	指標	項 目	指標	項 目			
(1) 個 別 的 特 性	①	年齢	取 入 と 支 出 の 状 況	①	収入の程度	し っ け ・ 信 条	①	礼儀	生 活 の 基 礎 的 条 件	①	公的扶助等の受給
	②	性別		②	収入改善の可能性		②	生活規律の遵守		②	制度的援助充実の可能性
	③	婚姻		③	生計の維持		③	社会志向の強さ		③	自己のコンペテンス改善の可能性
	④	教育の程度		④	生計の計画性		④	宗教性		④	状況改善の可能性
(2) パ ー ソ ナ リ テ イ	①	知的機能	経 済 感 覚 と 貯 蓄	⑤	金銭や物品の消費 感覚	慣 習 ・ 文 化	①	家中心	援 助 機 関 の 状 況	①	適切な援助機関の 有無
	②	情緒的機能		②	ローン志向性		②	義理・人情		②	援助機関への距離
	③	社会的機能		③	貯蓄状況		③	改革志向		③	援助機関の利用
	④	特徴的傾向		④	経済生活の見通し		④	理想志向		④	援助機関の許容度
(3) 心 身 の 健 康	①	心理・精神的健康 状態	職 業	①	職業の有無	自 己 意 識	①	人生の目標	趣 味 余 暇	①	趣味の有無
	②	身体的健康状態		②	職種		②	自己中心性		②	趣味・余暇意識
	③	家族の心理的健康 状態		③	職業の継続性		③	自律意識		③	趣味・余暇の内容
	④	家族の身体的健康 状態		④	職業への意識		④	自己覚知		④	趣味・余暇の広がり
(4) 問 題 の 概 要	①	問題の程度	生 活 状 況	①	世帯の規模	社 会 意 識	①	社会観	行 政 施 策	①	1 援助機関の適切 な地域的配置
	②	問題の性質		②	生計の責任		②	他者への配慮		②	行政施策の有無
	③	問題の起源		③	住居の状況		③	社会参加の度合		③	特定な国策の有無
	④	問題の経過		④	居住地区の利便		④	役割意識		④	住民大衆の理解

ソーシャル・ワーク実践をめぐるシステムの思考とその方法

内容 構成	5 組織(社会生活関係)		6 方法(課題解決方法)		7 展開(方法の展開)		8 機能(実践過程の評価)	
	指標	項目	指標	項目	指標	項目	指標	項目
(1) 家族	① ② ③ ④	① 家族の雰囲気	問題 解決 意識	① 問題意識の有無	課 題 の 設 定	① クライエントによる課題意識	ク ラ イ エ ン ト と 家 族 の 変 容	① クライエントの己理解とその成長についての自覚
		② 家族の理解と協力		② 問題解決意欲		② クライエントによる課題設定		② クライエントによる環境理解の程度
		③ 家族の形態		③ 問題状況の困難性		③ 設定課題の妥当性		③ クライエントの問題理解と解決能力
		④ 家族の人間関係		④ 問題解決案の有無		④ 課題追求の計画		④ 家族の成長
(2) 友人・近隣	① ② ③ ④	① 近隣の雰囲気	ソ シ ヤ ル ・ ワ ー カ ー	⑤ ソーシャル・ワーカーの配置	家 族 ・ 第 二 者 の 協 力	① ソーシャル・ワーク援助への理解	自 助 機 能	① 自律性の自覚
		② 友人の理解と協力		⑥ ソーシャル・ワーク・インターベンションの可能性		② ソーシャル・ワーク援助プログラムへの参加		② 自助意識
		③ 近隣との交流		③ ティーム・アプローチの可能性		③ 関連組織団体活動への参加と協力		③ 家族の自助意識
		④ 友人・近隣のもつ社会資源		④ 人的資源などの活用・開発の可能性		④ 家族ぐるみでの課題追求活動		④ 家族としての課題解決能力
(3) 援助機関の組織的環境	① ② ③ ④	① 援助機関の人びとの雰囲気	家 族 ・ 第 二 者	① クライエントへの理解	ソ シ ヤ ル ・ ワ ー カ ー へ の ア プ ロ ー チ	① ソーシャル・ワーカーの理解	課 題 解 決 機 能	① 課題達成のための期間
		② 援助機関の人びとの理解と協力		② 問題解決意識		② ソーシャル・ワーカーへの接近意欲		② 問題解決方法の妥当性
		③ 援助機関の人びとの交流		③ 助力の可能性		③ ソーシャル・ワーカーの活用		③ 課題解決行動の程度
		④ 援助機関での仲間との交流		④ 問題の解決援助方策		④ ソーシャル・ワーカーとの協働		④ 課題達成の可能性
(4) 職場・学校の組織的環境	① ② ③ ④	① 職場・学校での仲間との雰囲気	援 助 施 策	① 機関としての援助態勢	援 助 施 策 の 活 用 と 展 開	① 社会資源の理解	社 会 資 源 ネ ッ ト ワ ー ク	① 社会資源ネットワークの積極的利用
		② 職場・学校での仲間との理解と協力		② 援助機関のもつ独自の制度的施策		② 社会資源の活用		② 社会資源ネットワークの広さ
		③ 職場・学校での仲間との交流		③ 援助プログラムの総合的展開の可能性		③ 援助機関での施策具体化への関心		③ 社会資源ネットワークの有効性
		④ 職場・学校の人びとのもつ社会資源		④ 援助プログラムの有無と開発の可能性		④ 社会資源の限界と可能性の理解		④ 社会資源ネットワーク拡大の可能性



第一図 クライアント援助システム構造の構成関係と階層

としての家族への援助を積極的に志向しようとする動向がある。システム理論を十分に摂取し、構造や機能、過程にそれぞれ焦点をあてた独特な治療方法の展開がそれで、これらには学ぶべきものが多いことから、システム概念の特徴である構造と機能、過程の三特性の考察という視点より、ソーシャル・ワーク実践へのシステムズ・アプローチの方法を検討することの意義は大きい。

そこで実践方法として、まず第一に、システムの構造分析に基づく構造関係のアセスメントをしなければならない。これについては前述のごとく理論的なシステム構造の分析として、その概要はすでに拙稿^(註49)にまとめきたところである。そしてクライアント・システムに焦点化した構造とその関係のアセスメントを前掲論文にて詳述してきた。さらにその後パイロット・スタディを通じて、これらに検討を加え、クライアント・システムに焦点化した『生活援助システムの構成と内容』として第一表のごとく再構成し、その構造を7分類から8分類へ、①属性、②財政、③目標、④制度、⑤組織、⑥方法、⑦展開、⑧機能、と再類型化してみた。ここで構造分析をすることの意義は、(1)システムの構造理解、(2)その構造関係の把握、そして(3)構造のもつ特性を理解することであり、構造分析そのものが目的ではない。またこれらの構造は、実践過程を構成する四要素の下位構造を構成しており、上位構造との関係においては、独特なシステム関係を維持している。

この構造関係を第一図のごとく整理することができる。少し粗雑ではあるが、実践システムの全体像は、構造としてまず基礎的要素と実践的要素とに二大別できる。前者は、実践の基礎的条件であり、後者は、実践展開の手段的条件である。

これらは、それぞれ価値・知識と方策・実践方法からなる実践の四大要素を構成していることになる。さらに価値構造は、主に目標と機能からなる要素を中心に、隣接要素を摂取して、システムとしての実践活動に方向性を与える構造関係を構成している。知識構造は、属性と財政を中心にして、人と環境についての理解と情報から構成される基礎的構造である。これら四つの構造は、実践におけるクライアント・システムをめぐる主体的諸条件と考えることができる。

つづいて方策構造としては、制度と組織構造とがこれにあたるが、クライアントがもつ内的・外的な生活規範を含む援助のための諸制度とクライアントをとりまく社会生活関係で、実践を可能にする支援的条件からなる諸方策の総体的構造である。そして実践方法構造とは、方策を実現する援助活動からなる行動過程のシステム構造であるといえる。これらの四構造は、実践を展開するためにクライアントの意欲を含む主に環境とその資源のもつ方策・方法としての手段的・客体的条件といえることができる。

システム概念の第二の特徴は、機能特性をもつことである。この側面については、機能のある実体の働きとして現象的にとらえるのではなく、構造分析に基づく構造と構造との独自の結合がもたらす作用・効果・働きとその結果として、システムの的に理解すべきことがらである。前述のごとく統合的全体性をなすシステムを必要な要素に分解し、それらを構造として分析し、その構造関係をアセスメントすることによって機能を理解しようとすることになる。第一図は、(1)実践システム構造の成りたちを示すと同時に、(2)そのシステムとしての構造関係の階層性と、(3)相互構造関係とを示している。例えば基本的特性構造レベルでは、価値や知識構造（基礎的構造）の脆弱性を、方策や実践方法による実践的構造の機能強化によって補足し、実践構成要素的構造レベルでは、方策構造の不備を実践方法構造の拡充でカバーする。あるいはさらにその下位構造のクライアント援助システム構造レベルにおいては、制度構造の限界

を組織構造の再検討を通じて打開することなどが、その一例である。したがってこの図は構造間の均衡を維持する適応関係機能を示したものであり、個々の構造のもつ状況に対応して、他方の構造が補完的機能を果し、それによって構造関係が力学的に維持されるモビール（弥次郎兵衛・釣合人形）のような機能をシステムとして自律的に果すことを意味している。各構造を構成する下位システムの構成内容が、状況に対応して微妙に増減・結合・分離して変容する機能を果し、上位システムとしての構造を隣接構造との関係において変容させていく機能を連続的に果していくことになる。システムのもつ機能特性を考察するのに構造分析を前提にすることの意義は、構造関係を通じて機能特性を具体的に検討することが可能だからである。

さていま一つソーシャル・ワーク実践にシステムの思考を導入するにあたって重視しなければならない視点、それがシステム概念の第三の特徴である過程についてである。すでに何ども指摘してきたようにソーシャル・ワーク実践とは、援助の展開過程であって、実践研究とは、プロセス研究を深めることに他ならない。^(註50) したがってシステム特性としての過程は、われわれにとって、もっとも重要な概念である。これは構造と機能という二次元的な発想に時系列変化を加えた三次元的な思考である。元来過程とは、事柄の積み上げとそのことによる時間的変化の筋道を意味するが、厳密には、構造と機能のアセスメントを一定の時間的経過を追って試み、その時系列変化に対応した構造と機能の変容を考察することによって把握・理解することができる。

具体的には、ソーシャル・ワーク実践過程の展開モデルに対応させて、I局面（問題の把握と認識）、III局面（計画化）、V局面（評価）という三時点でアセスメントを試み、その流れと構造や機能の変容を評価することになる。短期処遇の場合には、インタークと終結の二時点くらいで評価することができるであろうし、特別長期にわたる処遇では、定期的に一定期間後アセスメントを加えることによって、その変容を適切に評価することができよう。

静態的な構造特性、動態的な機能特性、そして時間的な経過の中で両特性が発現する生態的な過程特性をみることによって、人間の生活をシステムとして統合的・全体的にとらえることが可能になる。

最後に、このようなシステムの思考をソーシャル・ワーク実践の科学的方法として、どのように効果的に活用することが可能なのかについて、触れておかなければならない。理論的にシステム概念の三特性について解説をしてきたが、この概念をソーシャル・ワーク実践の中に具体化するには、コンピュータの情報処理機能を活用すること以外に方法はない。まず第一に、システム構造の全体状況については、各構造を構成する下位構造（指標や因子）に、事実に基づいたデータとしての情報を入力することによって、クライアント・システムや実践活動システムの状況が計数化され、しかもシステム構造別に比較可能な数値が表示される。これらを評価することによって、クライアントの実態や問題点を容易に把握できる。

第二に、複雑な構造関係の実態について入力されたデータを、プログラムにしたがって情報処理することを通じ、ここでも比較可能な計数値が容易に得られる。これは構造関係のもたらす特性を機能として表示していることに他ならない。つまり各構造の実態を表示するデータを、構造関係に対応して多変量解析することから得られる数値は、構造のもつ機能関係そのものを現わしているからである。そしてその数値をどのように評価するかという課題が、機能の解説を意味することになる。

第三は、計数化された構造とそのもたらす機能の時系列変化を評価することである。計数値の改善は、問題の軽減や実践方法の妥当性、あるいはクライアントの変容や成長の過程を意味している。援助過程が展開される中で、時間的経過によって入力されるデータの変化が、状況を改善・改善するわけである。したがってどのような構造関係をもつ要素の強化が実践を前進させ、どのような要素を制御することで状況が好転するのか、その過程を考察することから正しい情報を得、実践方向を模索することができる。

コンピュータは、このようにシステムの統合的全体性へのアプローチを、構造・機能・過程の三特性から考察することを容易にしてくれる。こちらの意図するプログラムにしたがって、正確で迅速かつ忠実に、入力された情報を制御・記憶・処理・連絡・移動させる機能をもつのがコンピュータである。ソーシャル・ワーク実践にコンピュータを用いることの意義は、精密機械であるコンピュータが、ソーシャル・ワーカーに

代って判断を下し、援助活動を指示するものではない。あくまでプログラムの命令にしたがって処理した情報をソーシャル・ワーカーに提供してくれるにすぎない。したがってその活用のために、(1)どのような情報を必要とするのか、(2)提供された情報をどのように再処理するのか、(3)その情報をどのように判断し、評価するのか、そして(4)その情報をどのように実践に活用するのかは、まさにソーシャル・ワーカーの専門性そのものである。

7. おわりに

さて考察してきたようにコンピュータは、実践を科学的、専門的に活性化する手段であって、それをを用いる主体はわれわれ自身である。しかしそれは用い方によって人間の能力では簡単に処理できない複雑な過程を容易に扱い、求める情報を速やかに提供してくれる。その一つが、コンピュータ・シミュレーションである。本論考の目的は、ソーシャル・ワーク実践の科学的展開方法を、システムの思考に基づくコンピュータ・シミュレーション方法の活用を通じて促進させようとするものである。残念ながら今回は、そのためのシステムズ・アプローチの理論と方法の解説のみに終始したことになるが、方法の具体的手順や実証研究は、次の機会に委ねるとして、一般的にシステム工学の方法論として、既知のシステムを分析したり、未知のシステムを新しく創造するのに用いられる方法が三通りある。(1)シミュレーション simulation, (2)最適化 optimization, (3)評価 evaluation^(#51)が、それである。各々についての解説は、ここでは避けるが、これらは段階的な方法である。その初段階がシミュレーションである。これは思考実験とも呼ぶことができる模擬的方法で、コンピュータを用いて将来の予測を、具体的な例示を行いながら複雑な要素をからみ合せて考えることである。^(#52)そして近年これはシステム工学の領域ばかりではなく、日常生活の利便性を考えるのに盛んに活用されてきている。^(#53)

さてこのシミュレーション方法をソーシャル・ワーク実践にどのように活用することが可能であろうか。それはクライアント援助システムのモデル化を出発点にして、クライアントの問題解決を適正、迅速かつ満

足に、また援助活動としても科学的、専門的、効果・効率的に実践できるように、クライアント援助システムを構成する要素に模擬的データを入力し、つまり想定される効果的なインターベンションをいろいろコンピュータ・モデルの中で試み模索することである。そのことによってクライアント援助への的確な情報と示唆を得ようとするのである。

ソーシャル・ワーク実践においてコンピュータ・シミュレーションを活用することの意義は、極めて大きいとはねばならないが、一応その基礎的システムやモデルの理論化は完成できたと考えられるところから、次回にその実証的展開を試みてみたい。

注

- (1) R. L. Ackoff, *Systems, Organizations, and Interdisciplinary Research*, General System, 5 (1960), pp. 1-8.
- (2) L. von Bertalanffy, *General System Theory : Foundations, Development, Applications*, 1968.
- (3) 同訳書、フォン・ベルタランフィ (長野 敬・太田邦昌訳)、「一般システム理論—その基礎・発展・応用—」, 1973年, 35頁。
- (4) 同書, 50頁。
- (5) 同書, 28頁。
- (6) 同書, 36頁。
- (7) 同書, xiii 頁以下。
- (8) 同書, xv 頁以下。
- (9) W. バックレイ (新 睦人・中野秀一郎訳)、「一般社会システム論」, 昭和55年, 14頁以下。
- (10) Gordon Hearn, *Theory Building in Social Work*, 1958.
- (11) Gordon Hearn, *The General Systems Approach to the Understanding of Groups*, 1962.
- (12) J. G. Miller, *Toward a General Theory for the Behavioral Sciences*, The American Psychologist, Vol. 10, number 9, September 1955.
- (13) Walter Buckley ed., *Modern Systems Research for the Behavioral Scientist*, 1968.
- (14) Gordon Hearn ed., *The General Systems Approach : Contributions toward an Holistic Conception of Social Work*, 1969.
- (15) H. Goldstein, *Social Work Practice : A Unitary Approach*, 1973, p.

110.

- (16) A. Pincus and A. Minahan, *Social Work Practice : Model and Method*, 1973.
- (17) *Ibid.*, p. xiii.
- (18) M. Siporin, *Introduction to Social Work Practice*, 1975, p. 107.
- (19) *Ibid.*, p. 106.
- (20) B. R. Compton and B. Galaway, *Social Work Processes*, 1975, p. 61.
- (21) Charles Zastrow, *The Practice of Social Work*, 1981, pp. 464-482.
- (22) 遊佐安一郎, 「家族療法入門-システムズ・アプローチの理論と実際」, 1984年, 5頁。
- (23) J. G. Miller, *General Living Systems Theory*, in H. L. Kaplan and others eds., *Comprehensive Textbook of Psychiatry III*, 1980, p. 98.
- (24) *Ibid.*, p. 98.
- (25) J. G. Miller, *Living Systems : Basic Concepts*, Behavioral Science, Vol. 10, July 1965, p. 193.
- (26) J. G. Miller, *op. cit.*, 1955, p. 516.
- (27) *Ibid.*, pp. 520ff.
- (28) J. G. Miller, *op. cit.*, 1980, pp. 99ff.
- (29) J. G. Miller, *Living Systems : Structure and Process*, Behavioral Science, Vol. 10, October 1965, p. 374.
- (30) A. Rapoport, *What is Information ?* Synthese, 1953, 9, p. 169.
- (31) E. Schrödinger, *What is Life ?* 1945, p. 72.
- (32) J. G. Miller, *op. cit.*, October 1965, pp. 372-373.
- (33) J. G. Miller, *op. cit.*, 1980, p. 102.
- (34) *Ibid.*, p. 105.
- (35) 遊佐安一郎, 前掲書, 55頁。
- (36) J. G. Miller, *op. cit.*, 1980, p. 106.
- (37) 遊佐安一郎, 前掲書, 8頁。
- (38) J. C. Hansen and L. L' Abate, *Approaches to Family Therapy*, 1982, pp. 162-163.
- (39) *Ibid.*, pp. 166-169.
- (40) 遊佐安一郎, 前掲書, 237頁。
- (41) S. Minuchin, *Families & Family Therapy*, 1974, p. 14.
- (42) *Ibid.*, pp. 53-59.
- (43) *Ibid.*, pp. 60-66.

ソーシャル・ワーク実践をめぐるシステムの思考とその方法

- (44) J. C. Hansen and L. L' Abate, *op. cit.*, p. 140.
- (45) 遊佐安一郎, 前掲書, 184-192頁。
- (46) J. G. Miller, *op. cit.*, October 1965, pp. 337ff.
- (47) *Ibid.*, pp. 372-376.
- (48) 拙論, 「ソーシャル・ワーク実践プロセスとアセスメント」, 北星論集, 第21号, 1983年。
- (49) 拙稿, 「社会福祉実践の過程展開と方法・技術」, 仲村優一・小松源助編, 『社会福祉実践の方法と技術』, 講座社会福祉5, 有斐閣, 1984年。
太田義弘・佐藤豊道編, 「ソーシャル・ワーク／過程とその展開」, 海声社, 1984年。
- (50) 拙論, 「ソーシャル・ワーク実践システムとプロセス展開」, 北星論集, 第20号, 1982年, 4頁。
- (51) 渡辺 茂編著, 「システムとはなにか」, 昭和49年, 26頁。
- (52) 同書, 26頁。
- (53) 渡辺 茂編著, 「システムとシミュレーション」, 昭和50年, 2-4頁。

北星学園大学文学部北星論集第22号正誤表

頁	誤	正
4	(本文9行目) 要素の数 <u>全体数</u> を	要素の数 <u>全体</u> を
185	(本文1行目) Some <u>aspects on</u>	Some <u>Aspects of</u>
193	(本文17行目) NP <u>Ving</u> …連鎖は	NP <u>V</u> …連鎖は